

フィールドワークにおける人間関係

文・写真 榎永真佐夫 かしなが まさお

研究戦略センター准教授。専門は東南アジア民族学。西北ベトナムに住む黒タイの伝統文化の継承を主なテーマとして研究している。著書に『ベトナム黒タイの祖先祭祀：家霊簿と系譜認識をめぐる民族誌』（風響社 2009年）、『東南アジア年代記の世界：黒タイの「クアム・トー・ムオン」』（風響社 2007年）、その他論文などを多数執筆。第6回（平成21年度）日本学術振興会賞受賞。

ベトナムの山間部から

文化人類学的な関心から、ベトナム西北部でフィールドワークを初めて15年あまりになる。約50戸からなる黒タイ（ベトナムの公定民族分類では、タイの地方集団）の村に入り込んで以来、その村や地域の、あるいは黒タイやタイの文化、社会、歴史について知りたくて、周辺諸地域のみならず、ときには文献資料や人との出会いを求めてはるばるフランスまで足を運んだ。今でも、自分がずっと関わってきた村一つのことさえ、本当に深く知っているという自信はない。それでも、地域や黒タイの文化や社会について考える際、もっといえば、「人間の生活とは」といった文化人類学の本源的な問題を考える際、村での経験を思い起こさずにはいられない。それは、わたしにとって思惟の座標軸を形作っていると言っていい。文化人類学的なフィールドワークとは、どういう経験なのだろうか。

フィールドワークにあこがれて

文化人類学の教科書的な本をひもとくと、とにかく現地で暮らすのがこの学問特有の方法である、というようなことがしばしば書かれている。ご存じマリノフスキー（1884-1942）は、それまでの植民地人類学者と異なり、安楽椅子から立ち上がり、ベランダをおりて、現地社会のなかに住み込んだ。教科書的に有名なこんな逸話以来、現在でも、現地に長期滞在し、現地の言語を習得し、現地の人々との間に信頼関係（ラポール）を築き、調査者が現地の一員として受け入れられることが、人類学的フィールドワークの条件のように語られている。つまり、この学問では、1年や2年という長期間どこかに住み込み、現地のことばを話してデータを収集することが求められるのである。

こういうタイプのフィールドワークは、20歳かそこらのわたしを魅了した。もともとわたしは、どの集団や組織でも中心にはいたことがない。およそ傍観しているか、つま

はじきにされているか、そっぽむいているかである。立ち位置が立ち位置だけに観察は習性だし、書くのも好きだ。しかも、世間様の目が行き届かない、外国の未開っぽどこかに滞在して、土地の人がすることを真似してみたり、あれこれ尋ねたりするのは、いかにも性にあっている気がしたからだ。なにより「一人で」というのがたまらない。文学は学部だけでやめて、大学院から文化人類学を専攻した。

これまで報告の少ない土地に行きたい。しかし、食事おいしいところがいい。そんな理由で、ベトナム山間部に興味をもった。季候も悪くなさそうだ。

やりたがりの、「役立たず」

一人でのフィールドワークが実現したのは1997年である。ベトナム語は日本で3か月ほど学んでいた。ハノイに着くと、大学の言語学部の先生2人に家庭教師をお願いして2か月間、毎日学んだ。そのあとは、いきなり黒タイ（ベトナムでの公定民族名はタイ）の村に住み込んだ。もちろん、そんな程度でベトナム語は話せやしない。

ある村に通い始めて数日目、ちょうど市場に薪を売りに行くところの女性たちとすれちがった。挨拶すると、一人が連れにむかって言う。

「日本人だよ。タイ語はできない。ベトナム語もできない」。

聞こえよがしにわざわざベトナム語で言うのだから、悪意があるに決まっている。わたしはただ微笑んでいた。それくらいの疎外感なら子どもの頃から慣れている。いつかベトナム語も黒タイ語（タイ語の一方言）もペラペラになるだろう。なによりも大事なものは、信頼関係だ！村にひたりきることだ！そのためには、まず忍耐。

しかし、考えてもみればわかる。ある日いきなり役人が連れてきた、ことばもろくに話せないガイジンを信頼しろとは無理な相談である。村人があっと驚くような芸もなければ、ガイジンは金持ちと相場が決まっているのに、おごりもしな

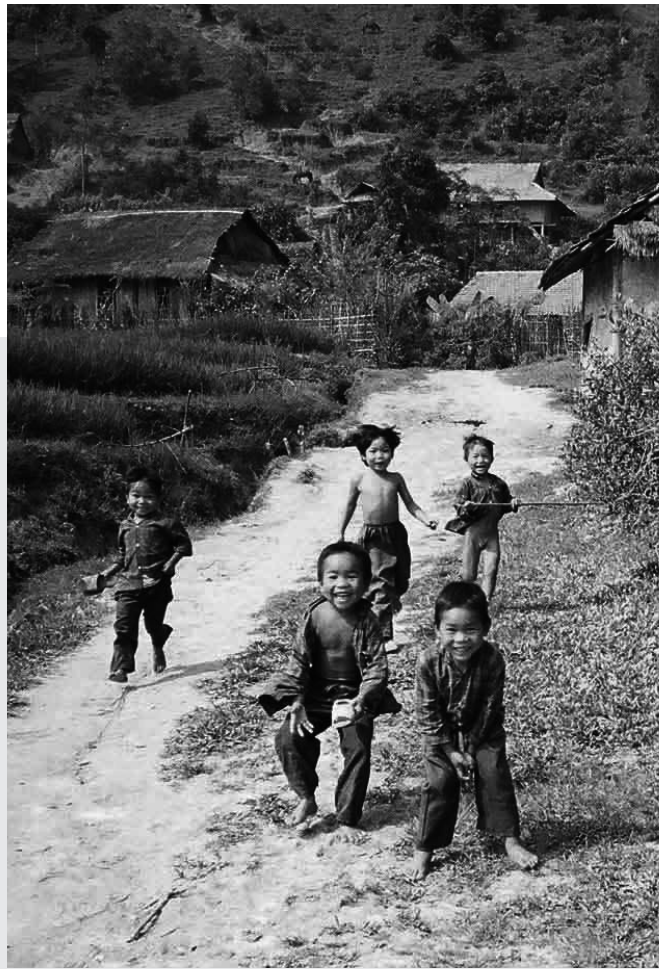
い。さあ、どうしよう。

ときは10月。稲はすでにおおた刈り終わっていた。家の改築があちこちで始まりつつある。好意でわたしの面倒を見てくれることになった家族も、築30年になる家を解体して、建てかえることになっていた。ちょうど都合がいい。力仕事には自信がある。役に立てそうだ。

二人一組になって大鋸を挽き、丸太を板にする。やってみた。膝、腰をうまく連

動させ、体軸を上手に使う、相手と呼吸を合わせ、上から見ると大きな円弧の軌道を描くように、腕をリズムカルにおしてはひく。おしてはひく。むろん、見かけより難しい。ものの30分で無駄に体力を消耗し、くたくたになった。日本で根性という美德を修養させられてきたわたしは、懲りずに翌日も挑んだ。しかし、何度も失笑を買ったあげく、ついに「疲れるから休んでいいよ」という思いやりのこもったことばで、解雇を通告された。

それからわたしは、愛想をふりまき、いろいろ手伝ったが。最終的に、柱にカンナをかけたり、墨ツボをおさえたり、板や丸太を運んだり、地ならししたりというなんでも屋におちついた。ようするに、誰にでもできそうな仕事ばかりだ。野球なら球拾いである。それでも参加させてもらえるのは嬉しかった。文化人類学のフィールドワークの基本は参与観察というが、たしかに参与は現地における調査者の位置づけに大きく左右する。調査者は、現地社会のどこかしらにかならず位置づけられるからである。



目新しいことに飢えている子どもたちが、遠くから走って寄ってきた
(1997年9月、ベトナム ディエンビエン省)。

村の大人たちは、農閑期であっても、家畜の世話、薪とり、炊事洗濯、池や水路の補修、家の改築、機織りや刺繍、結婚式や葬式などへの出席といったつきあいなどにいそがしい。子どもたちは、目新しいことにいつも飢えている。彼らはほくそ笑んだにちがいない。「いいところに、カモがあらわれた」。

わたしのすることなすこと、なにからなにまでおかしいらしい。どこにでもついてきて、ひそひそと「マサオ、マ

サオ」と呼び捨てにするささやきが聞こえる。家に誰も大人がいないある日、ためしに相撲をとってやった。これが男の子たちのツボにはまった。それからは、叱る大人が見えないと知るやいなや、どこからでも挑みかかってきた。なにしろ、村は子どもだらけである。しかも、小学校は午前と午後の二部交代制で、生徒たちは午前行くだけか午後行くだけかなので、一日中、子どもの姿が村にある。コワッパはいくらでもわいてくる。始まると、投げても投げてもきりが無い。用も足せない。カッパ相手に相撲をとってひどい目にあったという日本の古い話はこういうことだったのか、と後悔させられた。

しかし、子守をマスターするにはほど遠かった。とくに赤ん坊が泣き出すや、おろおろして子どもたちに助けをもとめるほかない。相撲以外に5歳の子ども相手に威張れたのは、トンボ釣りの腕前だけである。トンボは羽をむしり、分解して、ニワトリについばませた。

いかにわたしが村で無力だったか、枚挙にいとまがない。



改築の数年前から、必要な柱や板を準備し、保管しておく(1997年10月、ベトナム ディエンビエン省)。

クワをもって畑に行けば、帰ったあとで刃を見て、「ひどい使い方だな。力任せにやっちゃいかん」と持ち主に叱られる。「スキをひくのはスイギユウだから」と田んぼに入れば、スイギユウが気分を害して操縦不能になる。刃物で竹をけずって箸を作ろうしても、断面も側面もいびつな棒が何本もできあがるだけ。米を炊こうとザルを煽っては、もみがらや小石を除くどころか、米ばかりをあたりにまき散らかして、見かねた少女にザルを取り上げられる。囲炉裏で火の番をさせられれば、台所が煙って、咳が出る。洗濯しに井戸に行ったら、おばさんに笑われ、隣から「こうやるもんだ」と奪い取られて人の手を煩わせる。機を織っても、平織りが少しできるくらいだから、任せてもらえるほどではない。

県内の外国人を管理、監督を担当する公安が、わたしの行動と行状を事細かに調査していたから、もしかすると公安の記録がもっとも生々しくわたしのブザマさを記しているかもしれない。公安は、会うとしかめ面をとおしていたが、陰ではそうとうわたしのネタで楽しんでいたはずである。お礼を言ってもらっていい。

尋ねることの難しさ

日本を発つ前に、指導教官がおっしゃった。「フィールドワークのデータの厚みは、ことばがどれだけできるかによります」と。あるいは、ずっとあとの話だが、ある奨学金をいただいたとき、選考委員長の先生がおっしゃった。「どれだけことばが習得できるかは、現地の人々や社会に対する愛情に比例する」と。

まさにそのとおりである。インタビューするのにことばが不可欠だから、という理由だけではない。いつ、誰の、どんな発話の中に、どんな面白いネタが転がっているかわからない。つまり、現地で自然なコミュニケーションが取れないだけで、知らないうちにたくさんのチャンスを逃してしまうわけだ。打ち明ければ、今でもわたしのベトナム語や黒タイ語のレベルはたいしたことない。かなしいかな、村人たちの声も、ほとんどがわたしの耳を心地よくくすぐってくれる東風にすぎなかった。結局は、愛情が足りなかったということか。耳が痛い。それでも厚かましいインタビューを繰り返してきた。



物語の古文書を古老が音読してくれた。すでに、こういう物語の読み語りは村の娯楽ではなくなっている(1997年9月、ベトナム ディエンビエン省)。



カム・チョン先生の自宅で、文書を見せてもらう筆者(2003年3月、ハノイ)。

インタビューは難しい。他人にものを尋ねても、聞く側のレベルに応じた答えしかくれないものだからだ。月日が経ってから同じ人に同じ質問をしてみると、ずいぶんちがう答えが返ってきたという経験が何度もある。かならずしも前は隠していたとか、あとで当人の考えが変わったとはかぎらない。ようするに、1回目はナメられていたのである。素人に最初からいろいろ教えたって、どうせ理解できないだろう。ものには順序、段階がある。誰でもそう思う。果敢にも、農業全般、土地の分配や所有、染織物の生産、村の諸儀礼の過去と現在、地域の歴史など、ずいぶん多岐にわたるテーマについて、折に触れていろいろな人に尋ねてみた。しかし、わたしの理解は、どうもとおり一遍におさまっている気がする。村の人が悪いのではない。こちらの知識、理解力、熱意、懐の深さの問題なのだ。また聞き方も悪かったのだろう。むしろ彼らは親切だったのである。

文字文化への関心

植民地時代の行政官などの民族誌では、地理的風土、身体的特徴、歴史、生業経済、親族・家族関係、物質文化、信仰と儀礼祭祀、遊びなど項目ごとの記述によって、しばしばある民族の文化と社会が紹介されている。わたしも一つの村に数か月以上という滞在を繰り返していると、ベトナムのディエンビエン省の黒タイやターイの文化と社会についてなら、そういう本が1冊書けそうなくらい情報は集まってくる。さいわい日本では黒タイやターイなんて人たちのことはよく知られていないので、現地の人誰も読めない日本語で書いたり、話したりしている分には、現地の人に呆れられたり、怒られる心配もない。しかし、わたしにもウソは書きたくないという良心がある。それに、たまには村の人に褒められてみたいという功名心もある。なに

かないだろうか。

実は、黒タイには固有の伝統文字がある。タイやラオスに広く分布するタイ語系民族と異なり、仏教を受容していない彼らは、仏典も継承していない。そのかわりに自分たちの文字で歌謡、占

卜・祈祷書、物語、年代記、系譜文書などを記してきた。しかし9割の村人は、黒タイ文字を読み書きできない。これだ！いや、これしかない。

実をいえば、わたしはフィールドワークを始めた頃から、黒タイ文字を学ぶべきだと強く感じていた。それはこういう訳である。村人の母語は、ベトナム語でなく、黒タイ語である。だから最初は聞き知った黒タイ語の単語を、クオックグーというベトナム語ローマ字表記を用いて書き取ってみた。しかし、うまくいかない。というのはベトナム語と黒タイ語では、声調も違えば、母音も多少違うからである。黒タイ語にはクオックグーで記せない音があり、またクオックグーを用いて黒タイ語を記すための正書法も普及していない。いっそのこと文字と一緒に音を覚えるのが、回り道なようで近道ではないかと思ったのである。

村で黒タイ文字を読み書きできる人たちは、50歳代後半以上の人ばかりである。都合のいいことに、みんなもう隠居暮らしに近く、たいがい家にいる。彼らのもとに足繁く通って、読み書きのイロハを習い、あるいは書いたものを添削してもらい、語彙を増やした。

古クメール系の黒タイ文字は、おおよそ40の子音字と20の母音符合の組み合わせによる表音文字である。これに、半世紀あまり前にできた声調符合をつければ、6声調の区別もできる。しかも、不規則な綴り方をする単語は少ないので、音さえ正確に聞き取れば、ほとんどの単語は規則とおりに綴ればいだけである。手始めに、村の人たちの名前を書いてやった。みんな、「さすが、ダイガクインとやら



カム・チョン先生に同行した生前最後の親族訪問。左から、先生の美弟、先生、筆者、ブオン・チュン氏ご夫妻と娘さん(2007年9月、ベトナム ソンラー省)。

まで行って勉強した人はエライ」と、ほめたたえてくれた。勝った！はじめて、村の大人に勝った！

しかし、子どもたちが「これを書いて、あれを書いて」とおもしろがってせがむ単語は、ほとんどすぐには書けなかったから本気で尊敬されたわけではない。余談だが、近年黒タイ文字も読み書きできる某ベトナム人教授に、得意げに黒タイ文字とクオックグーによる献辞を添えて拙著を献本したら、「タイ語やベトナム語は国際的でなくて価値が低いから、日本語と英語の献辞も書いてくれ」と不平を言われた。村人だって、生活のためには黒タイ文字より、英語やフランス語を学びたい。彼らは自分たちの文字に、たいした価値を認めていないのだ。

生活様式の記録を書き残すこと

ベトナムで外国人が現地調査するには、役所や公安から許可を得るのが難しい。しかも2000年頃を境に、ますます難しくなった。ハノイで待機する期間がどんどん長くなる。ハノイでは、ベトナム民族学博物館に勤務していたカム・チョン先生のご自宅に、黒タイ文書の読みを習いに通った。先生は黒タイ首領の末裔で、文化に精通し、文書への造詣も深かった。

古い黒タイ文字では、いくつかの子音字、声調の区別が示されないため、文脈から各単語を特定しながら読み下す必要がある。しかも、言い回しが古く、比喩表現も多けれ

ば慣用句や別の物語を踏まえた表現も多い。また、古い慣習の記述もふくんでいる。だから内容を理解するのにたくさん知識が前提とされ、なかなか読み進めない。1998年頃から、先生が亡くなった2007年までの約10年間で読めたのはやっと10書に及ぶ程度であった。

しかし、たったこれだけの文書だけでも日本語に訳し、フィールドワークでの知見ももりこんだ訳注をつける作業はすぐには終わらない。たとえば『ソン・チュー・ソン・サオ』という、各地の黒タイのあいだで非常によく知られている悲しい恋物語の歌謡には、彼らの生活圏の生態環境、社会構造、文化に対するイメージが生き生きと描かれている。土地の人たちにも教えを請いながら、詳細な注をつけていくことで、黒タイの文化事典のようなものを作っていくのが、今後の楽しみである。

生活文化を書き伝える試みは、他にないわけではない。インドシナ戦争期(1946-1954)にフランス側に仕えて、その後アメリカに移住した首領一族の末裔が、2世、3世らのために、黒タイ語の辞書や教科書を編纂し、カレンダーを毎年発行している。教科書を見るだけでも、海を越え、山を越えたはるか故郷の村の景観、生活、風俗習慣を子孫たちに伝える難しさがひしひしと伝わってくる。

ベトナムではどうだろうか。役人や商人として1980年代以前から町で暮らしているような黒タイの家族になると、20歳以下の人の多くがすでに黒タイ語は話せない。村落生活に根ざした慣習も知らない。市場経済化が進むなかで、今は村の若者さえ現金収入を求めてどんどん町へ出て行きつつある。あと数十年も経てば、ベトナム語しか話せず、20世紀の村の生活様式をイメージできない人たちが多数派になるであろう。しかも一般的に若い世代は、自文化の継承に関心がない。だからこそ、村にいれば黒タイ古来の生活様式がかなりわかると幻想できた最後の時代の証人として、わたしは見聞を記している。



婚姻の宴会で、新郎方と新婦方の父系親族が歌合戦を行う。その際に歌謡「ソン・チュー・ソン・サオ」の一節がかならず歌われる(2003年2月、ベトナム ディエンビエン省)。

草についてアマガエル

それにしても皮肉なものだ。文化人類学では、慣例として、文化の概念を人間の生活様式全般の広義で用

いる。いわゆるハイカルチャーとしての狭義に限るのをむしろしりぞける(祖父江 1979:38-40)。しかし、村で惨憺たる無力ぶりをさらしたわたしが、村人にズブの素人ではないと認めてもらうには、読み書きのようなハイカルチャーの面でがんばるしかなかった。

草の根ということばが、開発援助の人たちの口の端にのぼるようになってすでに久しい。わたしは断じて草の根ではない。良く言って、草についてアマガエルである。草は、わたしが異物であることをいつでも知っている。謝礼という名目を借りたカネの力で情報を集めるようなことは控えているが、国際政治や世界経済のマクロな力学は、村の人々との関係性の中にあからさまに入り込んでいる。「あのホンダやトヨタの日本から、なにしろ飛行機でベトナムに来られるセンセイなのだ。金持ちに決まっている」と誰もが信じている。実際、この外国人はあるときは上等なバイクで、あるときは運転手に送られて4WDの車で来訪する。使い古しの100円のペンでさえ、村人が驚嘆する書きやすさだから、日本の物的な豊かさは口伝えで一带に広まる。下心があって親切を売ってくる人もいる。あるいは、知らないところで、わたしと関わりあいをもつ人たちに妬みや羨望がむけられていることさえある。「いい友だちもって、いい思いしているんだろう。それくらいしてくれ」という理屈である。

フィールドワークの根本は、人と人のつきあいである。わたし自身も不断に再編され続ける人間関係の網の目の中に、しっかりからみとられている。そこにももちろん厚意や親切はある。反対に、打算

もあれば、かけひきもある。謀略さえある。だから村でわたしはつねに自分の位置をはかり、人間関係に気を配る。

フィールドワークをめぐる、次のような批判が知られている。先進国からやって来て、戻ったあとは諸媒体を通じて「彼らの文化」のイメージを作り上げていく「見る側」としての調査者と、一方的なイメージを押し着せられる「見られる側」としての現地の人たちの間に、明らかに不平等な関係がある。それが文化人類学の営為を支えている、と。

そうした両者の関係性を認めたくえて、現実はまだ少し複雑である。上に書いたとおり、調査者もたいがいは不慣れた現地生活者として、社会のどこかにきちんと位置づけられている。そんなに尊敬されているはずもない。のみならず、現地におけるさまざまな力関係の中でどんな役に立ちそうか、人々に静観され批評されていることもまちがいない。ましてや、めざましく人が移動し、情報化も進んでいるグローバル化時代である。5年前は電気もなかったのに、今では皆、携帯電話を使っている。町に出た若者が、その気になればインターネットで自ら情報発信さえできる。電話やE-mailを使ったインタビューも可能だろう。フィールドワークの場合は、すでに現地からはみ出つつある。「見る側」と「見られる側」という単純な不平等関係を思い描いた時代こそ、まもなく懐かしくなるかもしれない。調査地から離れても調査者が調査地の人々と直接関わりあう生活が日常となり、その中で研究も続けられていくことになるのだ。



運転手タンさん(左)は、ガイドであり、インフォーマントであり、人生の先輩であり、友人でもある。不幸にも筆者の誤った指示により車ごと遭難しかけて、3晩野宿してくれたことも(2007年2月、ベトナム ソンラー省)。

【参考文献】

祖父江孝男 1979『文化人類学入門』中央公論社。